

14
4424
10





4424
10

大
1 29
28 9 4
30

居る品川の花川橋近くは定めん、其所は毎
神戸の苦境を救い出すらん自分は、先づ假の

標牛の萬年筆
明治三十三年の初春の上

大洋に出て

◇自己中心明治文壇史〇一十三

江見水蔭

二 大

日本町の博多館へ通ふので有る。

品川の日本橋への行通機関は、今より便利で、夏弱一頭立の鉄道馬車が、ハッ

山より芝口まで通ふので、それでは悠々

一時間程を費やすので、どうして汽車で新

橋まで行き、その外は鉄道馬車より

他はふいふ有る。

驛は現在の地点よりズッと南方で、鉄道

橋を渡り、右手は下り、下り有

る。建築地は明治初年、本邦神宮を陸

No. 五

蒸気機関車、其時代のボツツリで有る。

歩廊の外は直ちな海で、浪がヒタヒタと打寄

て有る。

此所より旧新橋驛へ今の沼留驛へ大概三

十分置き位では電車して有る。

自分は毎朝、生衣を着、二等車に乗る通つ

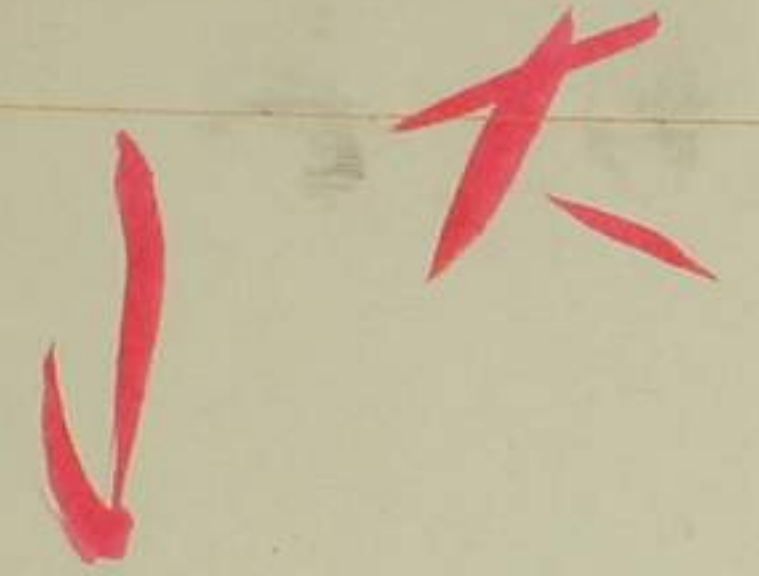
て有る。その同車では梅濱より通勤する紳士の

定連、毎朝乗る。中は高島嘉右衛門

とか、若尾造、山本と、大塚其家の話

見え、その人達、二等車に乗る。自分

No. 五



来て、巡査の文番まで引張らるる事が一度。
 赤い停車の扉を開けて車庫へ蹴んかき
 りで、驛長室へ引張らるるが一度。
 進行中の汽車の降りたのは、明りの討則に
 相当する。
 イヤ、汽車は進行中の停車を移つてある女
 中間が
 この問答も、東京日々、の記者の立脚点、
 来て、翌日の新聞で——鐘と撞木の間が鳴る
 一休問答の場——と素直に書かれた事

青い符
 三等へは乗り得るのた。
 神戸で揺めしを懐中して、尻を宇治野を
 教授けた時の事を思へば、そんな事は出来
 いりの、晴元運送は熱さをさるるで、自
 分は、困つた代物で有つた。
 毎朝、汽車が新橋へ着くと、イの一番、安廊
 へ降りて、真先、改札口へ出らるるは
 其日は一日不愉快な程、氣をイラ
 せしめる。其るは、汽車が、降りと誤認さ
 之は、ズと後の話である。

4 大

自分は、週刊 日 五平 日 の 筆 筆 筆 筆
 編集 編輯員として幸田露伴の名を出して
 三郎
 古洞 中川葦舟 齋木實直 (兼雨) 山春帆
 齋藤八三郎 西村直次 (醉亭) 若菜也
 冒新 (松魚) 赤田櫻桃四郎 (鶯塘) 山中
 (天溪) 伊藤正 田山詠弼 (花社) 田村
 彌 (青軒) 上村真子 (花川) 長谷川誠也
 江見忠印 (水菴) 山崎上操 (竹軒) 三宅孝
 争山の廣吉順で見たこと。

有つん。
 新橋驛の樓上には、こま 齋屋が洋食店を出して
 るん。其時代としては珍らしいのんが、汽
 車を待つ間、能く入つん。
 博文館の編輯の方は、本町の 舗 倉庫との
 間を入ると、ズツと 圓 圓の方の三階で、この長は平
 谷善四郎 (水菴) 編輯員 の 編輯員は 日 恭賀新
 年山の廣吉順で見たこと。
 高山林次郎 (櫻牛) 出原宗雄 (小波)
 鳥谷郎鏡右郎 (春汀) 赤内鏡平 (桂舟)

八 10 20 青山 二 西 齋屋の書

ト六

助今として西村評善を採用する事になった
らん。

大橋乙羽は、硯友社員で有り、らんぶ
狭い範囲のヲサ著目せず、各方向から新知識
を採用してらん。

赤門
赤無名の新文士として、既に西村を入らざる
るが有らん。乙羽は出版業者と文士なむ画家
との間に、~~連絡をとり~~、連絡をとり、
中心を討つるの知れよかつらん。自分の文士生
活の苦も十二分は知るべらん。

この時代、編輯局で、萬年筆を使用して
らんのは、高山樗牛が先鞭で、それより長谷川
天来、この二人位で有らん、他は皆毛筆を用
いてらん。

太平洋の創刊

明治三十三年の初春の中

右太平洋は日本に於ける、新聞新聞の開祖と
しよる。博覧館では大分緊張してらん。世間

6大

では、いつれ日刊新聞に変わるのをあきらめるとい

してある。自分のそれを希望してある。

主筆は自分かけれど、~~寄稿~~はる員を掛りて

有らん。殊に色摺の附録は、紅葉、笠村

露伴、幸堂、樗牛、乙羽、眉山、寅彦、藤水、

管軒、恩素、小波、魯庵、録雨、その他で、その

頃の知名の文士は、大概顔を揃へるべし有らん。

三十三年一月一日の発行で有らん、年内

は極度の多忙で、酔書と共日夜居るまで居残

つたり、牧野宗橋、秀英舎の語りありて

八 10 20 香山 二 西遊記の巻

終列車まで校正或は大組も従事したりし。

神戸新聞の事を考へるが、この佐藤佐藤の

は何んぞも無い事だのだけれど、~~他の雑誌~~の

編輯の、普通の執務振りや比べて見て、これ

は確かに食之間を引いたりと、ついでに

を雨ささずはるるれあつた。~~予は経験のせい~~酔書は日

比の顔さへ見れば、泣き言を並べるもの有らん。

これ以上、多忙で有

つねには乙羽で有らん。支配人としてその年末

の職務は、えんきざりなく、諸雑誌へも筆を執

り、その上で自著出版として、自著出版とい

高五

No.

No.

7大

であつたので、帰京して、硯友社の人々の
 処を、昔の如く訪問する機会が少かつた。それ
 は紅葉は、自分も神戸を去つた時の不始末か
 らして、其感情が全く融けず、それ又こん
 やで何となく、~~離れ難い~~ ~~状態~~ ~~で~~ ~~有~~
 る。
 素より自分が何処まで不徳ぶりを、正月
 年始に行つた時の、表心より詫言ひ。
 自分位君と違ふ心を持つ者は他に有るまい
 と思ふ。併しそれは自分として、慚愧を

ふ事は乙羽の始めの、最初、田原卯之東
 洋といふ東海散史張りの政事小説を出版し
 て、成功して、その日、藤侯實慶を出し
 之り當つた。歩む其他、初子集、花鳥集
 耶馬集、若葉集、昔、別して、千山萬水
 なる、續千山萬水、洋行後、日、政山米、
 考、いづれ、大当り、有つた。續千山萬水を
 後、黄舎で印刷中ぶりを、去張、物考と昔、出張し
 て、四時夜を校正をつゞけてゐた。
 自分は然るに、^{わが}多忙、多忙、一編り

110 青山 一河

大 10

西男
夢人

門下は紅葉と小波の他に抽^出て多かつた。
 紅葉側では例の四天王の他に佐東、宗明、斜
 江、等。小波側では湖山、荃山、その他で
 この中は荷風が中心の如く、能く記憶して居
 る。
 社中としては、思案が名を蒙り、帰つて来る
 し。眉山、風谷、桂舟、いづれも門下を同伴
 してゐた。自分は磯岸水、池田錦水、海山、此
 水、萬代花舟の四人を同伴した。
 社友としての格で、小杉天外、後藤宙外、来^會

小波の鏡花を改打

明治三十三年の初春の下

自分が紅葉の門下の勢力を重視してゐる動
 機とあり、又自分が久々で神戸の帰つた歡
 迎の意味を以て、一月三日、^新祝友社の新年宴會を牛
 込の常態で開く事と成つた。
 当日は門下を引席として、傳^へて祝賀を舉
 げるといふので、^新祝友社創立以来の大會と成
 つた。

15

(前巻) 社中の水蔭が依るは悪人とは
 ちは矢張り角々、袋々立てるは如何なる
 ぬがと控へつ。唯神戸と云へど旅の空は
 暫くもつと遇せし作事、悪事者との
 ぐず、樽舞台の舞ひ入りて早々、果の如
 き佳作あるは誠の喜ばしき事なり。
 とまを書いておいてみる、自分の持前
 の茶目氣合で、破んじ失言を悔みちの
 有つん。

11020 書山 二河 高野 啓

市川團次をモデルとし、その時
 代の事として、例の集合モデルで、当時不遇の川
 上喜三郎 ~~や~~、又自分の事を取り入れた
 りで有つん。
 新年號の巻頭の、松久知語を掲げ
 る計畫で有つん。推敲、推敲を重ぬそ
 る、縁切の間に合はせよつん。それで青軒が
 自分の旅後者を巻頭として工場の方へ引上
 る、
 延びしを ~~延びし~~ 延びしを巻頭した。(他は

高 五

16大

題とくふの起つん。

そのは 函館日日新聞の第六号(二月五日)の
 不平の第六号(二月五日)の
 9のり始まるんを有つん。

内閣總理 兼大藏大臣	紅葉	外務大臣	島外
内務大臣	柳浪	宮内大臣	眉山
海軍大臣	水蔭	陸軍大臣	露伴
文部大臣	逍遙	司法大臣	忍月
農商務大臣	乙羽	逓信大臣	魯庵
貴族院議長	思堂	衆議院議長	弦齋
学務院議長	小波		

柳浪と西院亭との出ん)

右不平の毎回は、短篇讀功小説を書く
 義務が有つん。(他々の寄稿は、
 毎回、魯庵、録雨の兩人が、乙羽との
 協同で、執筆せん。魯庵の匿名を
 用ゐてゐん。)

文士内閣問題

明治三十三年の春の二

その右不平の致上で、文士内閣見立問

八二五 第二 四三三

大

外務大臣

- ▲外務大臣 長田秋壽
- 外務次官(内田魯庵) 勅任参事官(徳富蘆花) 外務大臣秘書官(徳田秋聲)
- ▲陸軍大臣 淵塚麗水
- 陸軍次官(松原甘三階堂) 勅任参事官(小杉天外) 陸軍大臣秘書官(與謝野鐵幹)
- ▲海軍大臣 幸田露伴
- 海軍次官(田村松魚) 勅任参事官(藤本夕麿) 海軍大臣秘書官(神谷鶴伴)
- ▲司法大臣 石橋忍月
- 司法次官(桐生悠々) 勅任参事官(堺枯川) 司法大臣秘書官(寺山星川)
- ▲逓信大臣 江見水露
- 逓信次官(田山花袋) 勅任参事官(泉鏡花) 逓信大臣秘書官(新田静海)
- ▲農商務大臣 山田美妙
- 農商務次官(前田曙山) 勅任参事官(武田仰天) 農商務大臣秘書官(井原青々園)
- ▲宮内大臣 巖谷小波
- 宮内次官(川上眉山) 宮内大臣秘書官(黒田湖山)
- ▲皇室制度取調局主事(三木竹二)
- ▲樞密院議長 齋庭貞村
- 樞密院副議長(幸堂得知) 同僚問官(大槻如電、前田香雪、田邊進舟、藤本藤陰、戸川残花、高橋太華、中川霞城、關梅痴、倭野探菊、中村秋香) 樞密院書記官長(菊池幽芳)
- ▲會計検査院長(石橋思案) ▲検事總長(齋藤縁雨)
- ▲行政裁判所長官(角田浩々) ▲大學總長(高山林次郎) ▲學習院長(武田櫻桃) ▲華族女學校長(三宅花圃) ▲警視總監(黒岩派香) ▲臺灣總督(田岡嶺雲) ▲北海道長官(大町桂月) ▲東京府知事(藤原謙) ▲大阪府知事(渡邊霞亭) 京都府知事(三宅青軒) ▲待命全權公使(二葉亭四迷、嵯峨の屋ちむろ) 清國辦理公使(原抱一庵) 米國辦理公使(栗谷愚公) 英國辦理公使(水田南陽) 墨國辦理公使(松本春雪) 白蘭地辦理公使(飯田眞軒) ▲日本銀行總裁(大橋乙羽)

内閣總理大臣

- ▲内閣總理大臣 依田學海
- 内閣書記官長(廣津柳浪) 總理大臣秘書官(川尻寶岑)
- ▲大藏大臣 尾崎紅葉
- 大藏次官(後藤宙外) 勅任参事官(小栗風葉) 大藏大臣秘書官(柳川春葉)
- ▲文部大臣 坪内逍遙
- 文部次官(島村抱月) 勅任参事官(水谷不倒) 文部大臣秘書官(網島梁川)
- ▲内務大臣 福地櫻痴
- 内務次官(村上浪六) 勅任参事官(堀紫山) 内務大臣秘書官(榎本波笠)

(又) 文を男す

この車載がけりしを置けば好かひれりかか
 大分^{讀者の方}で興味を持ちたりで、今度自分^との
 主と成して、編輯^{この}人々^のに、加^加意^意を^を求^求め、長
 短子と^{無何有人の名}いふ^{無何有人の名}で、按書^の体^のを^を推^推ひ、文士内閣
 大見^の上^のを^を第^第八^八號^號(二月十九日)に指^指載^載せり。

大子

事は是る角大仕事で、正に其当時の文士録と
 見るべき也。
 處、こゝを藤原録雨が憤慨した。無聊生

二 字 二

河野鐵南、宅雁月、池本瘠星、安藤紫陽、山本郭
 外、溝口春翠、石丸紫水、岡稻里、鮫島大俗、梁
 田晴嵐、齋藤默蛙、金岡滄州、野間月桂、後藤薛
 花、溝口彩霞、松田琳雨、平忠宣、飛泉郎、新星
 滴翠、八朗、松濱、松波、藤酒舍、萩の戸、和郷
 歌二、股水、眉葉、村山鳥溪、村上濁浪庵、櫻井
 鷗村、岩崎幽香、野崎左文

▲各縣知事
 (羽山菊醉、中川愛氷、根本凌波、石井雲峰、骨皮
 道人、岡田翠雨、片山友彦、山村水郭、丸岡九花、
 多田漁山、山田芝園、春亭花友、武富瓦全、岡本
 狂奇堂、田代女之助、稻垣奴之助、山岸慈鷲、長
 野外苑、金子静枝、大須賀豊、水谷幻花、宇田川
 文海、加古殘夢、佐東柳水、岩崎舜花、並木萍水、
 關根默庵、廣岡柳香、北村馬骨、古川魁齋子、園
 部紫嬌、森しづか、本田瀧太郎、大森痴雪、鍋田
 氷村、雨谷一榮庵、久保田小塊、杉園阿彌、齋藤
 溪舟、中山白峰)

▲高等女學校長(小金井君子) ▲女子職業學校長
 (田中ゆき風)同教頭(伊藤簪花) ▲高等女子師範學
 校長(紫琴女史)同教頭(梶田薄氷)

No

三

二 字 二

貴族院議長(宮崎三味)書記官長(長谷川天濤)議
 員(岸上質軒、坪谷水哉、三品福溪、久保天隨、岡
 野紫水、鹽井雨江、黒川千淵、渡邊默禪、小林職
 月、土肥春曙、鶴亭飯人、上田敏、白河鯉洋、武
 島羽衣、佐々醒雪、笹川臨風、三木愛花、中内蝶
 二、淺野馮虛、石井研堂、森三溪、上村左川、緒
 方流水、小松蘭雪、大野酒竹、松岡調男、戸川秋
 骨、細川風谷、春山鶴峰、長井金川、戸澤藐姑射
 山人、鶴澤四丁、水口徹陽、馬場蝶、加藤紫芳、
 岡野知十、木崎好尙、磯野秋渚、土井晚翠、宮崎
 湖處子)

▲衆議院議長 村井弦齋
 衆議院副議長(松居松葉)書記官長(半井桃水)議員
 (大澤天仙、福田琴月、加藤眠柳、西村清山、藤井
 紫明、猪波曉花、西村醉夢、篠田胡蝶、島崎藤村、
 河東碧梧桐、高濱虛子、正岡子規、樋口二葉、星
 野天知、繁野天來、三木天遊、平尾不孤、黒田天
 外、京の葉兵衛、尾上新兵衛、磯津水、生田葵山、
 小島鳥水、渡邊飛水、竹貫佳水、泉斜汀、佐野天
 聲、蒲原有明、薄田泣菫、河井醉茗、太田玉茗、
 服部霞峰、齋木菊雨、羅蘇山人、星野巴露、村上
 二十二散史、關戸公園、朝倉盧山人、中村春雨、
 未松露香、萬代花舟、池田錦水、有本樵水、赤城
 巴山、中谷無涯、青柳有美、八木原散花、中村冷
 露、竹林巖、山岸荷葉、木村小舟、堀内小倉山人、
 天涯茫茫生、中野其村、福良竹亭、山田枯柳、平
 田吉村、山本笑月、中村樂天、國木田獨步、山下
 雨花、佐藤迷羊、高安三郎、伊良胡す、しらのや、
 五十嵐白蓮、吉田桂舟、高須梅溪、神戸春醉、田
 口掬汀、佐藤橘香、熊井秋菊、菅野雪城、野村袋
 川、千葉江東、一色白浪、堀井汀水、清水橋村、
 横瀬夜雨、小林天眠、山田野梅、宮田稜々、辻本
 秋雨、山中北渚、金尾思西、金子幽花、金子露園、

三

A 10 20 書山 二河部録雨

No

20大

は甚だ以て皮肉で有つん。

文士講談

明治三十三年の春の三

この頃、新聞紙上では講談が大流行で、ヤ
、と、小説を踏襲するのを見られてゐ
れ。講談では、まさか又普通の講談を入
れると、陸落出、高田先生
や市島先生の苦心、
和田垣謙三博士、松村収石、長田秋海なども

A 10 26 青い二河部講談

猶とて 文学口演會といふのを創り、
毎月牛込赤城神社境内の清風亭で、
催す事と成つん。それで速記を講談へ
連載するといふ趣向も有つん。

一月二十八日は第二回が催されん(第一
回の開催日は不明)その第三回目は、自分は
出演せよと紅葉の勸誘で、それでは、
録り、といふのを辯じ、これには、
旧著の魔の船出を材料するなりで、その
下巻を博覧館の編輯局で(退出時間後)

No.

No.

大

試み、同僚に聴いて貰うふと

当日八月日失念し清風亭で、妻女講談を

試み、其居氣、富む男が、成功の部

に入らん。

この文士講談は、果然(世間)で、

其後春陽堂から新小説の臨時増刊と

て、春陽堂と、いふのを出版する、自給で、四

月某日、牛久(二十勝町の川上眉山の宅で、その

文士講談を開く事と成らん。

聴衆は皆知らん者ばかりで、紅葉の園水の

八 10 20 書山 二 四 五 六 七 八 九 十

昼衣用心記の一章を、茶碗割と題して

演じ、鏡花の湯女の魂、小治の草の巻、

秋晴の血闘、眉山の五十年、自分の

八子銅山といふ、(茶碗割) 有つたが、そ

れ、就て紅葉が、次の如く云つてゐる。(茶碗割

の前遣——木川忠一郎速記)

入替りを替り長い間素人講談をお聴き入

りて、然るに——皆匠屋。皆迷惑の事とお

察し申しませう。水蔭居の口演が一時十

石より始つて同四十分、終りす、ちのち

大 二

三十分、鏡花のボ一時二十五分、二時

四十五分、三時、^異出が劃然一時間。

小波君の三時、四時五分と端が附い

て、秋篠君の四時七分、五時五分

と有り、(下略)

自分は車上の水の代りに酒を用ゐたので、

名を酔を何と云つた。何と云ふ。速記が出来

なかつたといふ。獨眼龍將軍とい

ふの自記を問はせ、事、成つた。

眉山は恥ぢんで、到頭口濁をせよ。後、自記

八 10 20 眉山 二河原野日記

で問は合せん。

然るに、^日春堂の^日出版された^日東京朝

日、其批評が、出し、替へた自分の

事を知らず、又全然口濁し、眉山の事

を知らず。それで其の語術の巧拙を論じて有

るので、事情を知る者は皆失笑した。(春堂

轉、他の幸堂の、^日穢多り大體、^日露伴の、不

安山が加へられた。

乙卯の送別會

明治三十三年の春の事

No.

No.

大 27

で発起
 前日海軍大臣の邸内で、園遊会を聞いた
 のか、今度是非外務大臣の私邸で開か
 せやうといひ
 それに文士内閣で外相を見立ててもらは秋傍
 が言ひ出したので、その能の邸を催す事と
 成つた。へ蓮門教主某の別邸——曾て紅葉が
 紅白毒鏡頭のモデルを用ゐ掛けた——度
 が非常の廣く、何十坪の有るといふ評判で
 一名化物屋敷といひをあら

大橋の秋傍の邸を流石に確り申す事
 自分か神戸新聞で発表した汽車の大

秋 二 月 九 日 初 日 ぶ ぐ 有 っ て 見 物 一 日 今 日
 如く民衆大家を呼稱せぬ時代では有つたが、
 一般の一般観衆の歡びをあらわす
 大橋の羽の世界博遊は確定した。そのなか
 送別會と紅葉、小波、水成、桂舟、冬の日
 秋傍

長田秘傳は、文士として異色有る者で、日清戦争当時、伊藤公の腰巾着のやうに成つてゐる事もあり、甚だ官吏と成つたり。けれども、素知らずの遊揚で、さういふ人にして、借金で首が廻らぬやうな事、無頓着な事、訂畫してゐる。

佛蘭西語を達してゐるのを、盛人の翻譯を試みて、問は合はぬ時は速記者の口授にして、各方向に密撃してゐる。博文館へ能く来て編輯局で野法雄を吹か、百回紙幣を

1020 書 三 國 語 学 会 報

No.

大 44

袴か、ツカミ出して見せびらかすのを思ふ。囊中無一文の事も珍しく無いのが有つた。三月二十一日、春季皇靈祭の日、その秘傳荘で、乙羽送別園遊會は催された。

二	字	サ	デ	の	号
---	---	---	---	---	---

御原伯露、小笠原子爵、肝付少将、角田竹冷、櫻原隆徳、大橋新太郎、遠藤龍水、石橋忠孝、楠正治、上田敏、岸上寛野、關如來、松原二十三郎、水野年方、梶田平吉、渡邊武郎、筒井年峰、佐々木信綱、桐生悠々、泉鏡花、柳川春葉、徳田秋聲、藤山洋季、島崎柳城、宮川春江、月川琴花、大和田建樹、幸田成友、中内鑑一、關梅嶺、市川玩球、大庭豊心、前田香雪、石井研室、藤木藤陰、徳井勉村、大橋省吾、大田實順、渡邊金秋、渡邊善也、掛川元明、福田琴月、藤澤四丁、四田敬止、藤倉直文、關原祐之助、京の藤兵衛、江藤直純、堀江文次郎、瀧本隆尚、齊木清四郎、齊藤紫白、小四五工門、瀧馬甲子三、河合芳太郎、佐居松葉、内藤湖南、竹貫登代多、田中猪太郎、瀧江隆、山田寒山、小倉倫司、尾形月耕

其他九十餘名。摸擬者、餘興、いんぐの中は、異彩を放つのは、山田寒山が、^{大道場}豪傑者に化けて、床の上で鹿瓜らしく来會者の人相を見て、

No.

25 大

猛烈に行つてゐる、或るローマ
 ンズと云ふ及
 んだ、角田老の、一時
 隠の状況ふ有つん。
 自分は又、大道砂書か屋、変相と、餘興を
 吹けるが、酔く酔くして、甚だしく醜態を演じて
 行く、行時、間、
 以後、禁酒を誓ふ、
 乙羽は三月三十一日、河内丸を舞つて、姉崎
 朝風(正治博士)と昔、度政の途、就いた、そ
 の通信は、右平、山、
 政山米水、とて連載

愛嬌の有る事を云つて笑ひやてゐるが、そこ
 へ角田真平(老)竹冷)が行つて。
 曰、ア私を見て下さう。と手を出した。
 寒山は云、眼鏡で字を見さう。
 貴郎は艶福の、女難の相が
 有ります。と書り出した、見兼ねて誰や
 り、寒山を、床に、
 寒山とソレと気が着いて、コレは、山と頭
 を抱へ、
 高朝、角田、
 老、
 身

26大

すれ、後又単行本とも成つた。

の出版

明治三十三年の春の五

太平洋の隊想ほど賣れあつた。固間新聞は外国でも餘り成功せぬといふとき、其時では猶更無理で有つた。

巻頭の讀切短篇小説は、イッラ自分が短篇好者で、毎週では書切らなかつた。その外、録雨、美水、繁水、春葉、鏡花、眉山などの

美水松花

短篇を賣イキを入つた。

花袋の録本で、園木田獨歩の短篇は二三種挿録した。其時初めて獨歩は會つた。

花袋は同ド編輯のするところ、自分と違つて生真面目であり、趣味と思想、其の時代の分見ると相隔離してゐる。餘りの親密な交際しなかつた。その外花袋は其時代の獨歩や藤村、その外柳田國男などと親しくあつた。

大正

乙羽より標牛の方が先きを行く筈だが、
 洋行、それは女当時の各階級、雑びり一度
 けりてきり、
 位が取らぬと云ふ傾向で有つ
 ら。
 紅茶と眉山の衝動が
 明治三十三年の初夏
 を受く可きものあり、紅露酒を嗜ま
 し、柳宙創作するの時は、忠実の
 を行い、大なる角多とす可きもの
 ある也。

No. _____

26

とまで痛罵してゐるが、併し其長所を賞揚
 しては、
 赤心の朝顔は、その中の尤も物とし
 て、採つて以て美文の摸型とふす可く、
 優々眉山兼水の徒を凌ぐを推ぶ。
 と大いに持上げ。
 見落し、ルゴエターのファストの比
 ず可く、ミルトンのバラダイスロスト
 の較す可き名篇ぶり、之を当今の吾
 が文壇に提出すれば、決して拙作の批評

八二〇 青山 二階堂 徳次郎

No. _____

2. 紫雲山の性格の相違、思想の離反を
 示し、遂に二人の間は文士劇当時
 の時々の復讐せざる終つて有つた
 それ等の劇中の時、又帰途の如きは
 相違が他故無きで、折柄の二等車、他の
 乗客の一人も無きを幸ひ、^五人の草葉集の
 の練習を続けふと、桂舟は全人の思想
 大食し
 紅葉は興に乗れば踊り、平素は
 厳格で、江戸ッ子の氣軽さは持てゐる

A 109 書 三河屋源四郎

紫雲の旅行の思ひの思ひ

自分とては、紅葉と昔は復つての筆に旅
 は之の最後で有つた。
 強き夜遅く錦糸堀驛に着いて、此で解散
 と成つた時、俤の關係が一番最後まで取
 つかぬ時、何んともいふ知らぬ寂しさを
 感ずるゝ有つた。
 遊者の友とていふ短編小説を、亦、同
 じ体裁で又博文館より出版した。
 六月頃、~~〇〇~~例の北清事件が始まり出た。
 右平海山の紙上には、軍事短編小説を掲載



する事は成つた。持書は桂舟で有る。

一方は、文士保護問題と云ふのが持上つた。

今日の文士成金時代と比べて、文士保護の悲鳴。

よ然とは、充分世帯の事情を察するべき。

ある。

(つづく)

